

小学校体育科における意欲を高める指導の工夫

教職研修係長 清水俊也

Shimizu Toshiya

要 旨

近年、子どもたちの体力低下が話題になり、活発に運動する子どもたちとそうでない子どもたちに二極化していると言われている。特に、活発に運動していない子どもたちは、運動に対する苦手意識をもち、意欲的に運動に取り組むことができない。そういった子どもたち一人一人の学習意欲を高める体育科の授業における指導の工夫について考察する。

キーワード： 知的好奇心、運動有能感、教材づくり、グルーピング

1 はじめに

体育の授業は、小学校の入学から高等学校を卒業するまでの12年間、必修教科として位置づけられている。このことは、運動することが好きな子どもたちも、嫌いな子どもたちも半ば強制的に体育の授業を受けることになる。どのような子どもたちにも、強制的に体育の授業を受けさせておいて、「記録や技能が低い」とか「活動の意欲や努力が足りない」といった結果や成果だけで子どもたちを評価してしまうと、体育科における学ぶ意欲を高めることはできない。

学ぶ意欲とは、「学びたい」とか「学ぼうとする気持ち」であり、体育科における学ぶ意欲とは、「楽しそうだ、やってみよう」とか「できないことができるようになりたい」、「もっとうまくできるようになりたい」という気持ちである。この学ぶ意欲の源になるのは、「知的好奇心」と「運動有能感」である。体育科における「知的好奇心」とは、いろいろな運動に興味をもち、それらの運動に果敢に挑戦していく気持ちである。また、もう1つの源である「運動有能感」とは、運動の上達や成功の体験から得られる「やればできる」という、運動に対する自信や自分に対する自信のことである。

このような、学ぶ意欲の源になる「知的好奇心」と「運動有能感」を維持し、高めていくための指導の工夫について研究し考察した。

2 研究目的

運動に対する苦手意識をもち、意欲的に運動に取り組むことができない子どもたちに対し、一人一人の学習意欲を高める指導について考える。

3 研究方法

- (1) 文献を通じて、学習意欲を高める指導の工夫について分析し考察する。
- (2) 学習意欲を高める指導について探求する。

4 研究内容

(1) 学ぶ意欲を高める指導方法の工夫

学ぶことへの意欲を高めるためには、子どもたちの実態や能力にあった学習内容や学習課題を設定する必要がある。難しすぎる課題を与えたり、逆に簡単すぎる課題を与えたりしてしまうと学習に対する興味だけでなく、意欲までもが失われてしまう。加えて、子どもたちの興味や関心を高める教材や教具づくりが重要である。子どもたちにとって学習内容や学習課題が面白くなかったり、興味をもてるものでなければ学習意欲は湧いてこない。逆に子どもたちの興味や能力に合った学習内容や学習課題が計画されていれば、飽きることなく意欲的に繰り返し学習に挑戦する。

また、体育の授業では、教室での授業と違って運動場や体育館などの広い空間を使って行われる。したがって、移動や集合、用具の準備等に予想外の時間を費やすことになる。これらの時間が多くなると、必然的に学習（運動）する時間が減少する。子どもたちの精一杯運動をしたいという気持ちを満たし学習意欲を高める、どの子どもたちにも充実感や達成感を味わわせ、意欲を高める指導を行うには以下のことに留意する必要がある。

ア 約束事を決めておく

用具の準備、準備運動、整理運動、後片付け、集合、整列などの基本的な活動については、子どもたちとの間で約束事を決めておく。例えば、運動場や体育館に入ってきたらまず何をするのか、毎時間どこにどのような隊形で集合するのか、準備運動や整理運動はどのような方法で行うのかなどである。これらのことを最初に決めておくことで授業をスムーズに展開することができ、これらの約束事を維持することで学習の規律も保たれる。ただし、注意しなければいけないことは、むやみに多くの約束事を決めないで、最低限の必要なものに絞って徹底することが大切である。また、約束事を強制しても子どもたちの意欲にはつながらない。約束事が何を意味するのかをはっきりさせ、なぜそれを行うのかを事前に説明し、理解させておくことが大切である。

イ 学習資料の活用

学習カードなどの学習資料は、子どもたちが円滑に学習を進めることを助けるものであり、意欲的な学習を促す重要な情報源である。その活用については、使用方法や活用の仕方を確実に伝え、理解させることが必要である。また、記述する内容が多すぎると、運動の時間を減らしたり、授業の勢いを奪ってしまったりすることがある。記入項目や記入方法を子どもたちの実態に合わせて、分かりやすく使いやすいものにする工夫が必要である。

また、デジタルカメラやデジタルビデオなどの視聴覚機器を活用することによって、子どもたちの興味・関心を高めるとともに、視覚的に自分の動作や技術ポイントを確認させたり学習内容をフィードバックしたりすることができる。

これらの学習資料を有効に活用することで、子どもたちの学習に対する意欲を高めるには効果的である。

ウ グルーピングの工夫

体育の授業では、グループで活動することが多く、その中で子どもたちは教え合ったり、励まし合ったりしながら学習を深めていく。そのため、グルーピングが学習を進めるうえでの学習意欲や学習効果に大きく影響することがしばしば見受けられる。例えば、ボール運動のような勝敗が関係する学習活動では、どのグループ（チーム）にも勝利の可能性がないと、授業に取り組む

意欲が低下してしまう。また、鉄棒やマット運動のような器械運動では、仲間の練習を補助する場面もある。そうしたときには、同じような体格の子どもたちでグループを作るのが基本となる。その結果、同じ高さの鉄棒を使って効率よく練習が進められたり、補助する場面でも同じような体格なので安全に補助が行えたりする。

また、メンバーの人間関係も重要な要素の一つである。人間関係が険悪であったり、一人の意見だけがとおってしまったりすることのないよう、十分に配慮する必要がある。

学級の人間関係や授業のねらい、運動の特性や施設・用具の数量など様々な角度から考察し、慎重にグルーピングを行うことにより、子どもたちの学習意欲を高めることができる。

(2) 学ぶ意欲を高める教材づくり

体育の授業で使われる「教材」の意味は実に多様である。ボールゲームで使用するボールや縄跳びの縄を「教材」と呼ぶ場合もあれば、サッカーやドッジボールなどの運動種目や器械運動の技を「教材」と呼ぶ場合もある。ここでは、運動種目や器械運動の技などの学習内容を子どもたちに分かりやすく伝えるものを「教材」と呼ぶことにする。

子どもたちの意欲や関心を喚起し、学習意欲を高める教材づくりについて、以下のことに留意する必要がある。

ア 運動技能の実態把握

子どもたちの運動技能の実態を把握することは、運動の進め方やルールを簡素化したり、学習機会を均等に保障したりすることが教材づくりの中核になる。

例えば、ドッジボールで子どもたちの投げる力や捕球技能のレベルが把握できないと、コートの大きさを決めることはできない。大きすぎるとドッジボールの特性やよさが失われ、小さすぎるとボールをよけることが困難になり、怪我につながることもある。そこで、「ドッジボールができるようになるには、どんな力が必要で、どうすればその力を身に付けさせることができるのか」という疑問をもつことが大切になる。その結果、ドッジボールの学習における子どもたちの、「ボールを投げる、捕球する、よける」といった三つの技能実態を把握することになり、「ボールはいくつ必要なのか、投げ方や捕球のコツやポイントは何か」といった教材づくりの基本が見えてくる。

つまり、教材づくりで重要なことは、子どもたちの運動技能の実態を把握し、子どもたちが各自の技能の実態に応じて、本気で運動に携わることができるような方法を具体化することである。

イ 学習課題の簡素化

体育の授業では、運動好きで技能の高い子どもたちだけでなく、体を動かすのも苦手な子どもたちもいる。そこで、授業では運動の動きをいくつかの場面に分けて別々に学習したり、ルールを変更したりしてゲームを簡素化する発想が重要になってくる。したがって、学習課題に取り上げた運動を可能な限り分析して、子どもたちに「どのようにすれば、その運動ができるようになるのか」分かりやすく提示する必要がある。それが教材づくりの基本であり、以下の点に留意する必要がある。

- ① 学習課題を細分化し簡単なものから次第に難しいものにつながるように提示する。
- ② 動きや動作の類似性を重視して、系統的に学習が成立するように工夫する。
- ③ 運動のコツやポイントを子どもたちに理解しやすい言葉で表現する。
- ④ 学習課題の達成感を味わえるようなスモールステップ教材を提示する。

ウ 教材の安全性と発展性

教材づくりを行ううえで、見過ごしてはならないのは子どもたちの安全であり、用具の安全性や適切な練習場所の設定には十分に配慮する必要がある。いくら効果的な教材づくりを行っても子どもたちの安全が損なわれるようであれば、それは本末転倒になる。

運動技能の習得においても、技能レベルが高い子どもたちが達成感を味わえるように、学習課題の広がりや発展性を工夫する必要がある。また、子どもたちが授業以外の時間にも練習したくなるような教材提示も重要である。運動技能は、体育の授業中に計画通りに伸びないし、授業中の運動機会は限られているからである。

(3) 学ぶ意欲を高める評価の在り方

体育の授業は、運動することの好き嫌いや、上手、下手に関係なく、自分の姿を教員や友達の評価の眼差しの中に晒さなければならない。どのような運動技能をもった子どもたちも、授業には今もっている力でしか参加できない。だからこそ、一人一人が最大限に生かされ、子どもたちの中に自己肯定感や運動有能感が広がり、学ぶ意欲が高まる評価でなくてはならない。そのためには、小さな技能の向上を評価することにより、子どもたちに毎時間少しずつ自分の技能が向上していると体感させる評価を行うことである。できた（成功した）という肯定的な評価は、運動有能感を高める。一方、できなかった（失敗した）という否定的な評価は運動有能感を下げたり、無能感を植え付ける。そこで、最終的に目標とした器械運動の技やボール運動などの技能の達成に失敗しても、その学習過程を細かく分析し点検することによって、できなかった（失敗した）と否定的な評価を行うのではなく、できた（成功した）ところまで認め評価することが、学ぶ意欲を高める評価につながる。

(4) 学ぶ意欲を高めるポイント

ア 知的好奇心を高めるポイント

① 学習課題を自由に決めさせる

単元の中で、自分にあった学習課題を自己選択させ、自由に学ぶことになれば知的好奇心が活発にはたらく。

② 学習目標を十分に理解させる

学習目標を理解し達成できると面白さが分かり、更に興味・関心の高まりにつながり学習意欲が高まる。また、学習目標が達成できたという自信が運動有能感につながり、チャレンジ精神を一層育てる。

イ 運動有能感を高めるポイント

① 成功体験を多くさせる

失敗が多く成功が少ない状況が続けば、どんなに忍耐強い子どもでも徐々に学ぶ意欲が失われていく。また、無気力な状況から脱出するためにも、成功体験をさせることが大切である。

② 子どもたちの成長を期待する

教師や親が子どもに期待することで、自分に伸びる力（潜在能力）があることを認められたと感じ、その期待を現実のものにするために努力しようとする気持ちが生まれる。ただし、過剰な期待には注意しなければならない。

③ 上手に励ます

有能感が失われたときや、大きな失敗が重なったときは上手に励まし有能感への欲求を刺激することが重要である。そうすることで再び有能感を求め学習意欲が高まる。

5 研究結果と考察

学ぶ意欲を高めるためには、いろいろな運動に興味をもち、それらの運動に果敢に挑戦していく気持ちである、体育科における「知的好奇心」や、運動の上達や成功の体験から得られる“やればできる”という自信を得る「運動有能感」を高めることにある。そのためには、子どもたちの実態や能力にあった学習内容や学習課題、教材づくりが欠かせない。学習資料の活用やグルーピングの工夫は、学習のめあてを明確にしたり、子どもたちが円滑に授業に取り組んだりすることに有効である。教材づくりについては、子どもたちの運動技能に対する実態の把握やそれに基づく学習課題の簡素化が大切である。また、評価については、子どもたちの小さな向上を評価することにより、有能感の育成につながる。

すなわち、子どもたちの実態を把握し、その実態に応じた学習課題や学習教材を提示するとともに、少しずつであっても学習効果を認める評価を行うことで、「学ぶことが面白く、運動することが楽しいと思う気持ち」と「運動有能感」が形成され、学ぶ意欲を高めることができる考える。

参考・引用文献

- (1) 桜井茂男(2004)『指導と評価』日本図書文化協会 pp. 42-45
- (2) 山本悟(2005)『体育科教育』大修館pp. 14-17